

【旧約聖書日課】エゼキエル書 2章1節～3章4節

2 ¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」²彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。³主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている。傾心知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と。⁵彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。⁶人の子よ、あなたはあざみと茨に押しつけられ、蠍の上に座らされても、彼らを恐れてはならない。またその言葉を恐れてはならない。彼らが反逆の家だからといって、彼らの言葉を恐れ、彼らの前にたじろいではない。⁷たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。彼らは反逆の家なのだ。⁸人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞きなさい。あなたは反逆の家のように背いてはならない。口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」⁹わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。¹⁰彼がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。

3 ¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」²わたしが口を開くと、主はこの巻物をわたしに食べさせて、³言われた。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。⁴主はわたしに言われた。「人の子よ、イスラエルの家に行き、わたしの言葉を彼らに語りなさい。」

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 10章8～11節

⁸すると、天から聞こえたあの声が、再びわたしに語りかけて、こう言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取れ。」⁹そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使はわたしに言った。「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」¹⁰わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった。¹¹すると、わたしにこう語りかける声が聞こえた。「あなたは、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない。」

【福音書日課】 マタイによる福音書 4章18～25節

¹⁸イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。¹⁹イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。²⁰二人はすぐに網を捨てて従った。²¹そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。²²この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。

²³イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病氣や患いをいやされた。²⁴そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病氣や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。²⁵こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

すぐに従う【こども説教のために】

主イエスの最初の弟子になったのは、四人の漁師たち、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、そして、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、この二組の兄弟たちでした。彼らは、漁師として働いていました。漁をするために湖で網を打ち、漁が終われば自分たちの仕事道具の網の手入れをする。毎日の仕事に励んでいたことでしょう。漁師の仕事は、危険の伴う大変なものですが、大漁になれば稼ぎも良いのです。誰でもできる仕事ではありませんから、皆、誇りをもって働いていたに違いありません。

その姿をご覧になられている方がいました。主イエスです。彼らが働くガリラヤ湖のほとりを歩いておいでになり、彼らをご覧になられたのです。もちろん、彼らは気づきません。自分の仕事に集中していたのです。けれども、彼らをご覧になられたお方は、近づいて来て、彼らに呼びかけられたのです。そして、おっしゃいました、「わたしについて来なさい」と。その呼びかける声を聞いた四人の漁師たちは、すぐにそのお方に従って行ったのです、仕事に使う網を捨てて、また、舟と父親とを残して。

日曜日の教会へと呼び集められて来たわたしたちは皆、主イエスについて来た者たちです。自分では、別の理由を考えているかもしれませんが、わたしたちは皆、主イエスに見られて、呼ばれて、従って来たのです。自分のしたいことや別の用事をいったん横に置いて、日曜日の午前中の自分の時間を手放して、従ってきました。そうするようにと、わたしたちをご覧になり、呼びかけてくださった主イエスが、ここにいらっしゃるのです。

人々をいやす

先週金曜日、教会の交わりの中で歩んで来られた一人の姉妹の葬送告別式を執り行いました。ご高齢になられて歩くのが不自由になられてからは、礼拝においでになれなくなっていました。親しい方たちとは交わりを続けてくださっていました。残されたご家族に信者はいらっしやいませんでしたが、教会で葬りの営みをなさることを良しといただき、教会の皆さんと共にこの礼拝堂で式を執り行わせていただくことができました。

葬儀に参列くださったご親族のお一人から、「教会では、このような葬儀が連日あるのですか」と尋ねられました。教会のことを良く知らない方からは、そのように見られているのか、と思いました。もちろん、そのようなことはありません。石神井教会では、非常に多い年でも 10 件にはならないでしょう。そうだとすると、教会にとって葬儀は、特別なことではありません。日曜日の礼拝がそうであるように、葬儀も教会の基本的な営みの一つです。人が生まれ、生き、そして死ぬ者である限り、教会は、その生と死にかかわる営みを、特別なこととしてではなく、基本的なこととして、いつでも引き受けられるように備えているのです。その営みを引き受けるためにこそ、教会があり、皆さんも教会に連なる者にされている、と言うべきかもしれません。

阪神淡路大震災から 30 年となりました。公式には 6434 人の犠牲者と言われていますが、もちろん、それにとどまらない多くの方々が被災され、犠牲になったのです。多くの教会も被災しました。信者の方に限らず、多くの方の葬儀を連日のように執り行った牧師、教会もあったと聞きます。そして、発災後の救援・復興活動の中で過労ゆえに命を落とした者も少なくなかったといえます。わたしどもの初任地、大分・佐伯教会のわたしどもより二代前の牧師は、大分から転任して神戸の教会に着任後、一年半で震災に見舞われました。まだ三十代、四人の幼いお子さん方のいらっしやる若い牧師でしたが、復興活動の中で倒れられ、急逝されたのです。その牧師に限らず、多くの牧師や教会が、人々の命にかかわることを後回しにすることはできなかったでしょう。それは、教会のなすべき基本的な営みだからです。

弟子たちを従えるようになられた主イエスの働きがどのようなものであったのか、福音書は簡潔に伝えています。御言葉を教えること、御国の福音を宣べ伝えること、人々のありとあらゆる病氣や患いをいやされること、この三つです。それは、教会が組織化され、専従の司祭・牧師が置かれるようになったから整えられた、というような働きではありません。主イエスが弟子たちと共に旅をし、人々と共に生きられる中で、当たり前の基本的なこととして始められたことなのです。そうであればこそ、教会は、その働きを引き継ぐのです。組織としてではなく、人として当たり前に、そうするのです。

巻物を食べる

もちろん、教会で連日葬儀が執り行われる、というようなことになるのであれば、それは緊急事態です。待降節に歌われる讚美歌、「起きよと呼ぶ声」は、17世紀初頭にヨーロッパでペストが大流行し、連日多くの人々が亡くなるという事態になったときに、毎日何件もの葬儀を執り行うことになった一人の牧師が作ったと言われています。ほぼすべての住民が信者であり、冠婚葬祭が教会の日常であるところにあっても、そこで起こったことは牧師にとって大きな衝撃であったのでしょう。

人の命にかかわることは、日ごとの日常でもあり、一人の人生の中で幾度もない特別なことでもあります。その両方がある、一人の人の命としてまっとうされるものです。医師や病院は、病人にとって不可欠な存在ですが、人の人生の一部にかかわるのみです。けれども、教会は、そのすべてにかかわるのです。人の命のすべて、人生のすべてにかかわり、その命のまっとうされることを願うのが、教会に連なるようにされた者の共同体の営みです。もちろん、わたしたちは、財産を共有して全生活を共にする、というわけではありません。それぞれに与えられた家族や人々との交わりの中で、日々の営みを続ける者たちです。けれども、わたしたちの家族は入れ替わり、人々との交わりも移ろいます。それぞれの人生、それぞれの命の営みが、生涯にわたって一つのものとしてまっとうされるために、わたしたちは、それぞれの日々の生活の場とは異なる、もう一つの共同の交わりが必要なのです。いつまでも続く交わり、一人ひとりの生と死を超えて続く交わりに加えられることが、わたしたちには必要なのです。

主イエスがお始めくださった交わり、共同の営みを、弟子たちは「教会」として受け継ぎました。そこで、互いの命にかかわることを、共に担い合いました。人々から見捨てられかけた命を目の前にすれば、我がこととしてかわり、自分たちの交わりの中で、共同の営みとして向き合ったのです。たとえ組織が整っていないなくても、そうしてきました。専従のスタッフであるかどうかにかかわらず、為し得るものは皆、そうしてきました。主イエスがそうなさったからです。主イエスに、そうしていただいたからです。そうしていただいた者は、自分もそうしないではいられないのです。

そう願う者は、命の糧を受け取らなければなりません。自分自身の命が枯渇してしまうことのないように、永遠の命の糧を、日ごとに口に入れ、腹に収めなければなりません。預言者が巻物を受け取り、僕ヨハネが天使から受け取ったように、口に甘く、しかし腹には苦い、永遠の命の営みに共に加えられるための巻物を、わたしたちは受け取り、いただき続けるのです。これを受け取らせるために、主は、わたしたちをお招きくださったのです。